

雑詠日記

徐山猿声

卷の二

一九八九年

市井一人

「ここに不思議なのは、われわれの間には、詩を判断し解釈する人よりも、詩をつくる人のほうが多いことである。詩をつくることは詩を理解するよりも容易である」とフランスの思索者≡モンテーニユは言った。一方、「詩人が見者となるが為には自己の一切の官能の、深刻なそして理論的な紊乱によらなければならぬ。あらゆる種類の愛情を、苦悩を、狂気を、彼は自らの内に探究し、自らの内に一切の毒を味わいつくして、その精華のみを保有しなければならぬ」と本物の詩人「N・P・ランボーは言う。その天才が十九歳で詩作の筆を絶ったというのに、四十を過ぎて歌や句の真似事をする身の程知らずもある。まことに人生は、詩の題材を探すにたやすいが理解するのに難しい。詩を詠むことは難しいと言わなければならない。ただ、「生きとし生けるものいずれか歌を詠まざりける」という本朝歌人の言葉に励まされているうちに、雑詠記録も二年目となった。

正月三日

夕やみの湖水に眠る山沈む

一月十七日

寒鮒が朽ち葉と眠る池の底

一月十九日

春雨が時を過つ寒の日々

一月二十六日

救急車かすかに叫び馳せて行くいのちは何故にかくもか細き

一月三十日

息はずむ霜置く朝の親子連れ

二月二日

見つめれば空に引き込む雪の舞

「自然は謎の詩にほかならない」——プラトン

二月四日

蓑虫の店子養う枯木立

二月五日

軽やかにいのちのはずむ若き人堀の柳の目を覚まさせる

「文語・漢語・雅語というようなのはつきりしたしるしをつけている言葉は、文学においてであれ、実際の生活の場においてであれ、いまやパロディ的にしか使えない、といつていい」——大江健三郎『新しい文学のために』。

二月八日
まだ闇に鐘の響きを包む雨

二月十二日
長い陸のくちばしが／ 大きく呑みこんだ遠い湾は／
ぼんやりと青い／ 夕日に照らされた白い船が／
この口から逃れようと／ 日に導かれて湾口に向かう

「まったくへば詩人くらい自信の強い者はない」——『エッセー』。大江健三郎が言葉を生かすことの困難を語れば、モンテーニュは拙い試みを皮肉る。

二月十三日
鶏の時打つ声が早すぎた目覚め励ますもう夜明け前

二月十六日
紅白の萩の根植えて芽吹き待つ庭のかたすみ春まだ浅い

二月二十日
保健所へ健康検査に行く妻の自転車をごぐ姿いさまし

二月二十四日

階段を石垣たより降りる父老いた姿はやがてわが身の

春の雨老父の肩に重く降る

ストーブの前で土筆の皮をむく妻は気づかう実家の便りを

三月三日

木蓮の花の白さに洗われて心静める春の夕暮れ

三月七日

ひよどりが寒さにひるむ春の雪

三月八日

花たちを白装束に春の雪

春雷にめげず降りしく雪の精

三月十一日

レンズの形をした月が横になって西の空に。太陰暦二月五日。

きさらぎの月も瞑想まぶた閉じ

三月十八日

親戚の葬儀。昨秋父を見舞った人が逝く。

菜の花と桃が語らう風の中

三月二十二日

花冷えの月咲き匂う春の宵シェーラザードの夢のささやき

三月二十九日

車中思いがけない場所で富士を見る。真っ白い山容が卓絶した存在に見え、不思議な感じさえする。平凡だが、

富士の嶺は朝日に光る雪白くひとり気高し天をめざして

春の陽に花もほころぶ八幡の社殿を渡る白無垢の人

(鶴岡八幡宮)

舍利殿に文鳥仏をことほぎぬ

大鐘のかたわらの鈴藪椿

三月三十日

芦ノ湖が眼下に光る春の空ロープウェイでゆるゆる散歩

箱根路はここめ桜と坂下る

三月三十一日

茶所の花散らす雨めぐみ雨

バスで帰る途中、西の空に傾いた日が城趾の爛漫の春を照らし出していた。
「春を惜しむ」と題し、

春城花燃 華弁染濤

楊柳遊風 釣人戯水

如何日傾 惜千金時

四月二日

城跡に風邪を養う花見かな

(萩)

四月九日

志賀の島かすみの海に望みつつ草匂い立つ丘の径行く

四月十四日

春雨の下に虹見る鏡山

四月十五日

浜千鳥波を数える春の朝

雷山の雷眠るかすみ籠め

四月二十四日

花吹雪はらはら落ちて八重桜そよぐ青葉を春のかたみに

五月二日

風に泳ぐ鯉は青葉の森目指す

五月七日

「二見浦に新たに注連を張るを見る」

麦秋雲低く樹青鮮かなり

田園に車を駆って飛燕と競う

山を越え海辺に奇巖と対すれば

日影は天涯にただ遼遠なり

五月十日

宵ついて人形家を棄てにけり

五月十三日

市美術館へ山種美術館所蔵近代日本画名作展を見に行く。大観の墨一色の
絵巻物は、画家が対象を把える目の確かさ、それを平面に構成する才能、細
部を見事に描く技術を見せてくれる。

霧雨が五月を描く人もまたもの見る心みずみずしくあれ

五月二十二日

朝、イギリスで世話になった若い知人の訃報に接する。夜、シュトゥットガルト室内管弦楽団を聴く。それぞれ自分の顔を持った人が特徴ある動作で楽器を奏く。いのちははかないが、人は音楽を作り出すことができる。弦に弾んでいるのは人間のいのちだ。はかない生命はこうして生きそれを伝える。

行く春や傘打つ雨に余韻あり

五月二十七日

人恋し土曜の午後の仕事部屋遅い歩みに希望を託す

六月二日

六月の夕日はやさしくて 見つめることを拒まない

びわの実と同じ色した夕日見る

六月三日

山荘の初夏の窓辺の揚げ羽蝶ひそやかに舞い木の間に消える

サーフィンの旗指し物や初夏の海

六月七日

露光る瑞穂の国の箱の苗

六月十一日

梅雨晴れの木立の影の簾り堂太鼓の音に響く水音

六月十二日 □

今月初めの北京天安門での流血事件を悼んで、杜甫の「悲陳陶」を改作する。
題して「悲北京」。

初夏十郡良家子

血作中南海中水

街曠天清無民声

二千義民同日死

群狼帰来血洗銃

仍唱狼歌飲都市

都人挙頭向天啼

日夜更望人權至

六月十九日

そろそろと梅雨の山路を越える月

六月二十三日

「雨細やかに降る夜 杜甫の詩を読む」

細雨 都市に垂れ

白煙 炉に漂うが如し

巷人 宵に憂いを洗い

朝に 緑葉の露にま見えん

細やかに雨垂れる町見はるかし詩聖のうたを闇に聞き入る

六月二十六日

何でもないことで失敗をし、自己嫌悪に陥る。室内楽を聴きに行ったが、心に不協和音が残っていた。

街灯が映すわが影肩落とすあまりに苦い身の愚かしさ

七月一日

盲目の詩人ミルトンは音の世界に何を聞いただろう。

犬騒ぐ遠い花火の夜は更けてやがてしじまに雨垂れの音

七月七日

『失樂園』のイーヴが禁断の実を食べた箇所を読んだ直後、蛇に逢う。

『失樂園』読んで出会った青大将

七月九日

鮮やかな赤い洋服試着する十五の娘笑顔こぼれる

フアインダに娘と月と美人花

七月十八日

同僚・学生とキャンプへ。満月の照らす浜辺でバーベキュー、テントに寝れば砂の音する。

厳かに雲の帳を透かし来て朝霧払う夏のあけぼの

海津見の波が集めた砂浜で仮寝すなどり人のいのちは

天の原漂う島は月真近か

七月二十日

岬から航跡を引く船上で大海渡る風と語らう

見渡せば見島一つ見ゆ海広し

夏の日に大海原を渡る蝶

七月二十九日

ホームステイに来たパキスタンの小学五年の女の子を太宰府へ案内する。

陽の透ける楓も揺れず蝉しぐれ

陽を逃れ蜥蜴が憩う寺の門

八月五日

世話をする浴衣の妻の夏祭

八月八日

声高く秋立つ夕べ鳴く鳥よ何を伝えに君は来たのか

八月十日

山上の墓に詣でて香焚けば入り江を渡る遮断機の音

打ち水で眠りに入る鉢の合歓

八月十二日

『臨濟録』を読み始めた。初学者には禪問答は難解でとらえどころがない。

カーテンが包む夕風軒の月

八月十五日

トンネルの名は白拍子山中の盆会の花は紫の萩

八月二十日

睡眠不足のままぶらぶら過ごす。FM放送が、二人のピアニストによる「熱情」の演奏を続けて流していた。

熱情は人それぞれの音色／ 端正でしかし力強く／
あるいはゆったりした石作り／

熱情を楽譜に書いた男は／ 誰よりも激しい情熱に溢れていた／
だが さらに強い意志も持っていた／

日曜日の朝 眠気まなこの男は／ 魂がかすかに揺れるだけ／
貧弱な意志を突き破らないように／
弱音器をつけた熱が震えるだけ

九月八日
朝露に手づから植えた萩の花

九月十五日
雷におののいて散る白い萩

九月十六日
白萩に花卉とまごう蝶潜む天高く翔ぶ身を夢に見て

九月二十二日
彼岸の夜鳴く虫の声切々と此岸に生きるいのちの響き

九月二十三日
「海の中道」という言葉が今日は格別の響きを持つ。

彼岸の陽海の中道照らし出す

わが地球天の子午線今日よぎる

ローマ法皇がガリレイ裁判の誤りを認め、地球はやつと堂々と天を旅することができるようになった。

十月四日

学生の葬儀へ。車窓から見る田舎家の黄菊が目にしむ。車中 Hawking の『A brief history of time』（訳本）を読み始める。「宇宙はここから来たのか□ 宇宙はどのように、そしてなぜ始まったのか…」

踏み超えてその身を囲む状況を突き破りしや若きおののき

十月十二日

月懸かる空を満たした落ち着きがわが身を浸す秋の夕暮れ

十月十四日

月からの声が聞こえる静夜かな

十月十七日

怪獣の大足に似せたスリッパを履いた娘の受験勉強

十月十九日

コスモスが見上げる空は大宇宙

十月二十二日

赤ん坊表情豊かその個性やがてその名と一つになりゆく

十一月二日

ざくろの実深まる秋にはちきれて声上げたまま時止めてある

秋風 暮色濃まやかにして

細月 金星に添う

父子は堤上に遊び

天と地に相和して詠ず

明星と三日月仰ぐ親子連れ

十一月三日

秋の宵 露台に立てば、雲の帳は将に天を蓋わんとす、

鐘声 方寸に響き、我をして自然に帰らしむ

十一月九日

思い知る人を無能と侮った言葉はすぐにわが身を刺すと

十一月十九日

三浦梅園旧宅を訪ねる。自筆の天球図・書・顕微鏡など、老婦人が説明してくる。人は、宇宙を知ろうと欲する。

湯布岳が光の影にそびえ立つ高原の道すすき耀く

十一月二十三日

行く秋は鈴なりの柿置土産

十一月二十五日

小春日に豊かな山が包み込むただやさしくこの私を

いのち刻みそそぐ光に老いる秋限りなくとおしく思う

十一月二十六日

海を見る柿の木の上過ぎた日々

かりがねが五羽明星へ渡り行く

十二月二日

冬空に金のゴンドラ浮かび出て雫一粒星ときらめく

(金星食)

金星を瘦軀に抱く冬の月

十二月五日

百円の花二か月を鉢に咲く

老父の体調不調と母より電話。

年寄りのやすらぎ願う老いこそは悲しいもの光明照らせ

十二月十一日

木枯らしに立ち惑いおる枯れすすき

直線の若木の斜面冬を撃つ

十二月十四日

父の病状急変。道を急ぐ。

枯れ野行く風竹林を吹き倒す

十二月二十二日

初七日を過ぎて白菊なお開く

(十五日父死す)

十二月二十七日

石露の綿ぼうし実る年の暮れ

この冊子を先考に捧げる。

一九九〇年正月
徐山亭 謹製

「傾聴と驚きのみで」

R. M. リルケ

傾聴と驚きのみで、静であれ

私の深い深い生命よ

風が欲することを

白樺の震へぬ前に知る為に

そして若し沈黙がお前に語ったら

お前の官能にうち勝たせろ

総べての氣息に身を与えろ、従へ

氣息はお前を愛し揺ぶるだろう

さうしたら、私の魂よ、広くなれ、広くなれ

お前に人生が成功するやうに

お前を晴衣のやうに広げろ

物を思う事物の上へ

